D 122　明治期衣服の研究（第十二報）　── 多十郎の衣服 ──

昭和女子大学家政　村井不二子　　昭和女子大学短大　○安藏裕子

目的　1794年、仙台石巻から江戸に向かった米穀船「若宮丸」に乗船の水夫らは、ロシア領に漂流、その後11年余の歳月を経て、うち４人が帰国した。本資料は、船乗りのひとり、宮城県鳴瀬町の多十郎が着用し持ち帰った洋装（上衣）である。約200年前のロシアにおける史実を背景とした資料の歴史的、地域的、用途的、形態的位置づけについて明らかにする。

方法　ロシア領漂着から帰国まで、多十郎らがたどった軌跡を追い、年代、地域と、その服制等にみられる形態的特色及び着用範囲を検討し、同時に資料の実測調査を行い、形態、構成、縫製技法上の特質と照合する。

結果　形態は、スタンドカラーのダブルブレストで、打ち合わせは左右両用となっている。ポケットは異様に横長で後身頃まで廻っている。丈が短かく、材質は非常に厚地の毛織物である。これらのことから、形態的には水夫などに用いられた特有のデザインで、寒冷地における素材の特質性が示されている。